城下町高知の成り立ち

この地図は、高知城を中心とした藩政時代の城下町と現在の高知市を重ね合わせています。

高知城の築城開始とともに、本格的な城下町の建設が慶長６年（1601）から始められ、お城を中心とした武家の住む郭中は、南の鏡川と北の江ノ口川との間、東は堀詰（地図の新京橋付近）、西は升形までの区域に設定されました。町人街は、郭中を挟んで東西に設けられました。郭中の西側には武家の奉公人が多く住んでいたので、北奉公人町・南奉公人町などの町名が見られ、東側のはりまや橋界隈には、移住者の出身地を示す掛川町・堺町・京町や、商工業者の職業名をとった細工町・紺屋町などがありました。

また、地図のように、ほとんどの街区は現在よりも藩政時代の方が大きく、その中央には水路が流れているところも多くありました。城下町には、この水路で区切られた細長い町が数多くつくられました。

歴史の道沿いには、藩政時代の名残があちこちに顔をのぞかせています。皆さんも街並みをよく観察してみてください。（旧町名案内標識を凡例に従って設置しています。）

この地図は、「寛文七年高知図」（1667）を参考にして、平成12年現在の街区割と重ねて作成しています。

旧町名は、「旧町名保存伝承事業」の対象とされた、昭和11年（1936）から住居表示実施直前までの55町名を記していますので、江戸時代の町名とは異なるものがあります。